

雲默撰『釈迦如来行跡頌』に見られる天台教判についての一考察

朴 昭 映

一

天台教学において八相成道と五時八教を結びつける構成の基調は、『法華玄義』第十卷の「今以轉法輪來八教通之」⁽¹⁾などの所説にあると考えられ、『法華文句』『摩訶止観』『四教義』等、また、唐の湛然述の『止観大意』等にも散見される。高麗の諦観録の『天台四教儀』には五時八教の中に、八相成道が化儀四教の鹿苑時と化法四教の三藏教との二箇所に大乘と小乗の二種の八相が記述されており、「八相成道」の用語を化法四教の別教および円教に用いている。また、化法四教の通教に「現帶劣勝應身成佛」となっているので、藏・通・別・円の四教のそれぞれの立場から八相成道が示されていることがわかる。

このような『天台四教儀』の五時八教と八相成道は、以後、中国において天台宗の記伝史である宋の宗鑑集の『釈門正統』(二三七)の「釋迦牟尼世尊本紀条」、宋の志磐撰の『仏祖

統紀』(二二六九)の「釋迦牟尼仏本紀条」に継承されている。この両書において八相成道の第七轉法輪相に五時八教を入れる構成の枠は、高麗の天台僧雲默撰集の『釈迦如来行跡頌』(二三二八)とも共通するところである。⁽²⁾特に、雲默は撰述当時に廃仏の前兆を感じ、『天台四教儀』の五時八教と八相成道を基にした釈尊伝の観点と末法時代に修すべき修行の面に特に注目したと言える。

しかし、筆者の分析によれば、『釈迦如来行跡頌』(以下『行跡頌』と略す)の場合は『天台四教儀』の文によるといながらも必ずしも『天台四教儀』の所説をそのまま用いている⁽³⁾。『行跡頌』に見られる天台教判は、中国や日本にて行われた「五時八教に関する論争」⁽⁴⁾とも関連性があるので、趙宋天台の影響下にあつて、高麗の白蓮結社の流れを汲む雲默の立場を明確にするためにも綿密な分析が必要である。

本稿では、一三二八年という高麗の時代的な背景により撰集された『行跡頌』には雲默の独自の観点が、天台教判にお

いてどのように見られるかについて考察してみたい。

二

そもそも天台教学における「教相」の定義は『法華玄義』の第一巻に「教者聖人被下之言也 相者分別同異也⁽⁵⁾」となっており、「五時八教に関する論争」を通して天台大師の教相論として『法華玄義』の「一卷教相」と「十巻教相」があげられてきた。『法華玄義』の第一巻と第十巻に見られる教相は、五時と化儀の四教、化法の四教とはどのような関連性を持つものであるか。また、『天台四教儀』には諦観の思想がどのように入れられて構成されているのであろうか。

筆者の分析によれば、『行蹟頌』には『天台四教儀』の五時八教によりながらも、『法華玄義』の「一卷教相」と「十巻教相」に関する明確な認識があったと把握される。それでは、雲默は天台教判をどのような観点から構成したかを、『行蹟頌』の「釈迦如来一代記」の五時を通じて検討してみたい。

(一)『行蹟頌』の五時に見られる『法華玄義』の「十巻教相」

「大綱三種」の教観二門

頓・漸・不定の教観二門が設定されている「大綱三種」は『法華玄義』の第十巻に説かれており、これを「十巻教相」と言われ、既に関口真大先生により天台大師の教相のすべてをつくすものであると指摘された⁽⁷⁾。では、この「大綱三種」

は『行蹟頌』の五時にどのように構成されているのであろうか。

雲默は『行蹟頌』の「釈迦如来一代記」を構成する際、八相成道は三三頌→一三七頌に該当し、八相成道の中、第七転法輪相（六八頌→一二三頌）は天台の五時八教によって述べている。また、雲默は八相成道を通釈にし、五時を別釈にしており、五時をさらに通釈と別釈に分けていると分析される。六八頌とその注にて、『天台四教儀』の要点を五時及び化儀四教、化法四教の順で説き、最後に「これ五時八教の大綱と為す。具には天台妙玄中にとくが如し⁽⁸⁾」⁽⁸⁾と言ひ、『天台四教儀』の文を引用しつつ、五時八教によって総論的にまとめている。次に、六九頌→一二三頌は天台の五時教判を各論的に詠ったものであり、頌と注においての特徴のある構成から雲默の観点が見られる。特に、第一華嚴時、第二阿含時の後に、「華嚴阿含一時」を八五頌→八七頌に挙げたのは雲默の独自の視点であろう。雲默は「華嚴阿含一時」を設定し、頌に構成させた後に五時と総括している。これは五時八教と頓・漸・不定の「大綱三種」の教観二門に対する自らの観点を明らかにしたことによると考えられる。即ち、雲默は「華嚴阿含一時」を単なる不定教のみではなく、不定教相と不定観という教観二門から構成したのである⁽⁹⁾。

『行蹟頌』の五時に見られる教観二門に関する観点は、大

雲默撰『釈迦如来行蹟頌』に見られる天台教判についての一考察（朴）

雲默撰『釈迦如来行跡頌』に見られる天台教判についての一考察（朴）

覚国師義天（一〇五五～一一〇二）による高麗天台宗の開宗の意義でもあり、高麗の白蓮結社においても常に重要視されていたことが資料によって確認できる。⁽¹⁰⁾

また、『行跡頌』の一二〇頌～一二三頌の注には『法華玄義』の第八巻の経による修行門を引用した後、智顗撰の『観心誦経法』を引用している。『観心誦経法』は高麗の白蓮結社の書籍にも引かれており、一心三観によって『法華経』の読誦を修行すること、『法華玄義』の「十巻教相」の頓・漸・不定の教観二門とともに四教と空・仮・中の三観との関連も考えた上で構成したと推測される。

（二）『行跡頌』の五時に見られる『法華玄義』の「一卷教相」

「教相為三」の本迹二門

『行跡頌』には、『法華玄義』の第一巻に見られる教相の大意、即ち、「教相為三 一根性融不融相（迹門） 二化道始終不始終相（迹門） 三師弟遠近不遠近相（本門）⁽¹¹⁾」もあわせて構成されていると把握される。その根拠を挙げると、次のようである。

『行跡頌』には第五法華涅槃時⁽¹²⁾は一〇〇頌～一二三頌であり、一〇〇頌～一一五頌を法華時にし、一一六頌～一二三頌までを涅槃時としている。特に、一一〇頌～一二二頌の法華時の注に後の五百歳という末法の時代だからこそ、仏本地の寿量の開頭を聞くことの勝縁の素晴らしさを讃え述べている

高麗の『白蓮結社文』を引用している。さらに、一〇六頌～一二二頌の注に『法華経』の本門の「如来寿量品」を長文にわたって引用した後に、

本眷屬者、佛説迹竟、欲顯本地本時弟子從地涌出、數不可説。皆久植德本、具諸三昧、有大神通。非是伽耶成佛所化、如父少子老、令衆不信。是故如來說壽長遠、以決衆疑、令獲大利十信。⁽¹³⁾

と、述べており、これは『法華玄義』の「一卷教相」の「教相為三」、第三の師弟遠近不遠近相に該当するものである。この観点は高麗の白蓮結社の第二代祖師の天因撰『静明国師後集』にも見られるので、高麗の白蓮結社においての本門の観点を継承していると考えられる。

なお、華嚴の三照・法華の信解品・涅槃の五味とともに譬えとして用いる『天台四教儀』とは異なり、『行跡頌』には五時の最終の各頌に『法華経』の「信解品」のみがあげられている。これは第二の化道始終不始終相に該当する。⁽¹⁵⁾

また、第一の根性融不融相は、頓・漸をはじめ、華嚴の三照譬と涅槃の五味の相が結びつけられていること、また、不定・秘密いわゆる化儀の四教によっているので、ここには五時八教の要素があると見られる。『行跡頌』の五時は五時八教によって構成され、また、五味の機根の熟成による一仏乗への開会の内容を述べているので、第一の根性融不融相も見られると言える。

(三)『行跡頌』の「五時」重視と『法華玄義』の第十卷に見られる「教相為三」

『法華玄義』の「一卷教相」の大意、即ち、「教相為三」は『法華玄義』の第十卷にも見られることは、既に佐藤哲英先生⁽¹⁶⁾や関口真大先生⁽¹⁷⁾によって指摘された。

しかし、筆者の分析によれば、『法華玄義』の第一巻と第十卷の「教相為三」の構成には異なる点があると把握される。即ち、第一巻は「教相為三」に、第十巻は教相の大意章に記述しているので、第十巻は教相の大意(仏意)を明らかにする点に重点をおいて本迹二門の観点から述べている⁽¹⁸⁾。したがって、第一巻は一・二・三の順序に各々の項目を分けて具体的に説かれているが、第十巻は全体的に仏意を表す目的で、第一の根性融不融相と第二の化道始終不始終相があわせて構成されていると分析される。この点から諦観が『天台四教儀』にて、「是為五時亦名五味」⁽¹⁹⁾と記述する根拠になったのではないかと推測される。なぜならば、根性融不融相と化道始終不始終相は両方とも迹門であり、衆生の機根を熟成させて出世本懐の仏意を現すものなので、内容的に一致するのである。このように雲默は『法華玄義』、また、『天台四教儀』の観点を綿密に分析し、より一層、「五時」を中心とした構成を生み出す根拠としたのではないかと考えられる。雲默が特に、「五時」を重視したことは、釈迦如来の行跡を撰述する時、

時間的な流れを重要視したこと(撰述当時を仏滅二二七七年と定めるなど)と共に、化道始終不始終相による『法華経』の「信解品」に注目したことによると考えられる。即ち、これは『法華経』の読誦が行われた高麗の白蓮結社の修行傾向を雲默が継承していることによるからであろう。

三

雲默が一三二八年に『行跡頌』を著述する時、八相成道の中、第七転法輪相(六八頌―二三頌)は天台の五時八教によって述べている。即ち、五時八教と八相成道、本迹二門と教観二門、『法華玄義』の「一卷教相」と「十巻教相」等を基調とする天台教学によったことが本書の一つの特徴として挙げられる。このように、『行跡頌』には『天台四教儀』において明らかに見られない天台教学を改めて考察し、高麗の白蓮結社の修行傾向を取り入れながら雲默の独自の観点から構成したと把握される。特に、一一三頌―一一五頌の注に見られる『法華経』の「安樂行品」は高麗の白蓮結社の修行である智顗撰の『法華三昧懺儀』による観点からの構成であると思われる。

このように『行跡頌』は智顗の『法華玄義』をはじめ、唐代・宋代の天台思想は勿論、高麗の白蓮結社の修行傾向を視野に入れながら雲默自らの天台教観として再構築した点で、

雲默撰『釈迦如来行跡頌』に見られる天台教判についての一考察（朴）

大変奥深く、卓越な著作として評価できると思われる。

- 1 『法華玄義』第十卷、大正蔵三三、八一二上。
- 2 一方、雲默と志磐の観点には違うところがあるので、綿密な検討が要求される。筆者は既に『行跡頌』に記述されている西土祖師の法脈を『仏祖統紀』を初め、諸書籍と比較してみた（拙稿、「高麗天台宗の法脈相承に関する研究（一）——義天と白蓮結社を中心にして」『天台学研究』六輯、大韓仏教天台宗天台仏教文化研究院、二〇〇四年、三六一～三九六）。
- 3 拙稿、「高麗天台宗の法脈相承に関する研究（二）——義天と白蓮結社を中心にして」『天台学研究』六輯、天台仏文化研究院、二〇〇四年。拙稿、「釈迦如来行跡頌』に見られる第四禪九天について」『天台学報』第四九号、二〇〇七年。
- 4 中国にて宋の志磐撰の『仏祖統紀』（一二六九）、明の智旭述（一五九九～一六五五）の『教観綱宗』、また、日本にて佐藤泰舜著『支那仏教思想論』（一二三六）の研究以来、一九六六年から一九七八年に至る十二年間、十余名の学者により「五時八教に関する論争」をめぐる四八編の論文が出された（関口真大、『天台教学の研究』、一九七八年。佐藤哲英、『続・天台大師の研究』、一九八一年）。
- 5 『法華玄義』第一卷、大正蔵三三、六八三中。
- 6 『法華玄義』第十卷、大正蔵三三、八〇六上。
- 7 関口真大、「化儀四教論」『天台教学の研究』、一九七八年、四三～四四。
- 8 『韓国仏教全書』六冊、五〇〇中。
- 9 『法華玄義』第十卷、大正蔵三三、八〇六下。拙稿、「雲默撰『釋迦如来行跡頌』の「華嚴阿含一時」説について」『天台学報』

第五十号、二〇〇八年。

10 崔滋撰の「萬徳山白蓮社円妙国師碑銘」、天頤撰の「普賢道場起始疏」など。

11 『法華玄義』第一卷、大正蔵三三、六八三中～六八四上。

12 『韓国仏教全書』六冊、五〇三中～五〇八上。

13 『韓国仏教全書』六冊、五〇四中～下。

14 『韓国仏教全書』六冊、一九七下。

15 『法華玄義』第一卷、大正蔵三三、六八四上、「又異者。餘教當機益物。不説如来施化之意。此經明佛設教元始巧為衆生。作頓漸不定顯密種子。中間以頓漸五味。調伏長養而成熟之。又以頓漸五味而度脫之。並脫並熟並種番番不息。大勢威猛三世益物。具如信解品中説。與餘經異也。」

16 佐藤哲英、「天台大師の教相論について——関口博士の所論に關連して」『印度学仏教学研究』二五——一九七六年、五七～五九（関口真大、『天台教学の研究』に再収録、一九七八年、三七八～三八〇）。

17 関口真大、「化儀四教論」『天台学報』第十号、一九六七年、一七～一八（『天台教学の研究』に再収録、一九七八年、四二～四三）。

18 『法華玄義』第十卷、大正蔵三三、八〇〇上～八〇一上。

19 『天台四教儀』大正蔵四六、七七四下。

〈キーワード〉『釈迦如来行跡頌』、天台教判、『法華玄義』、五時八教、三種教相

（叡山学院比叡山文化研究所研究員）